



農学部 100周年 によせて

— あの頃を振り返る —

昭和48(1973)年3月 農業開発工学科卒業
堀井 潔

カーラジオから流れる森田公一とトップギャランの歌「青春時代」を懐かしく聞きながら思い出したのは、卒業を控えた約50年前の2月頃の出来事です。当時、私は農業施設学研究室に在籍する4年生でしたが、担当教官である小出進教授から、「今日卒業判定会議があり、君は必修単位である測量実習の単位が取れていないので、このままでは卒業できないと判断された。直ぐに担当教官の伊藤(精延)先生の部屋に行って詳しい話を聞いて来なさい。」と指導を受けた。

測量実習の単位が取れていないとは?と思いつつ、農学部南棟5階の研究室から階段を駆け下り、廊下を走って中央棟1階の農地造成学研究室の伊藤助教授を訪ねて、開口一番「小出先生から私は測量実習の単位が取れていないので卒業できないと言われました。」と話したところ、伊藤先生は、私に向かって「まあ座れ」と、事務職の女性には「私にお茶を、堀井君にも」と話された。暫くしてお茶が出ると、先生からは「最初に急須に入れたお湯は茶葉を洗ってすぐに捨てるのが肝心である。また、お茶を入れるときの湯加減が大切である。社会に出るとお茶を出す機会があるかと思う。等々」、肝心な話しはそっちのけで、お茶談議が延々と続いた。

こちらは弱みがあるので、拝聴していた話がようやく一区切りがついたところで、私が「あの一、先生」と言うと、先生は「あ一、そうだった。君は2年生の時のフランス式庭園の平板測量の図面が未提出だった。」と言われた。2年生の後期は、所属していた弓道部が関東代表となって伊勢神宮大会に向けての強化練習や遠征が重なると共に友達との付き合いで、つつい図面作成を後伸ばしにして遂には忘れ去ってしまったことに気が付いたが、後の祭りであった。

ようやく伊藤先生からの「君たちのクラスで一番出来の良い図面がここにあるから、明日までにこれを写して持って来るように」とのご宣託を受けて、その夜は墨で手を真っ黒にして慣れない烏口を使って線を引き、絵の具で彩色を

施して悪戦苦闘の末にようやく明け方になって一夜漬けの平面図が完成した。その成果により2年生の測量実習は「可」を頂戴して、無事卒業することが出来たという苦い思い出となった。付け加えると、私が参考にさせてもらった立派な図面を書いた、新型コロナ前は共に同級会、海外旅行で一緒だった級友が喜寿を前に他界したことは真に残念であった。

私は、その後宇都宮大学院に進み、2年後には農林水産省構造改善局建設部水利課という部署に配属された。当時、新人教育の一環として、農業工学職の新人は朝1時間前に出勤して、課長を始めとした職員の机の拭き掃除とお茶出しを1年間経験させてもらった。特にお茶出しは、お茶の熱さや濃さに好みのある先輩がおられて随分苦労したが、あの時に上の空で聴いていた伊藤先生のお茶談議が役に立ったことは言うまでもない。

昭和56(1981)年3月 農芸化学科卒業
高橋 英二

私は、1981年3月に宇都宮大学農学部農芸化学科を卒業し、卒業後は、地元である群馬県庁に入庁しました。入庁後は、当時の園芸試験場、農業総合試験場と11年間、試験研究機関で研究に従事しましたが、その後は、本庁で行政事務を経て、2019年3月に県立農林大学校で定年退職となりました。

当時、地元群馬県には、農学部のある大学はなく(現在は、高崎健康福祉大学に設置されている)、近隣で、農学部のある大学と言えば、新潟、信州、宇都宮でしたが、伝統ある宇都宮大学農学部を受験しました。

大学生生活の思い出は、農芸化学科でしたので、3年次の農化棟での実験です。ビーカーや試験管などを使い、クラスメートとわいわい・ガヤガヤしながら実験・実習などしたことが懐かしい思い出です。4年次になり、私は、前田先生・宇田先生(現同窓会長)の食品化学研究室にお世話になりましたが、当時は、まだのんびりした時代だったので、研究室で、卒論研究の間に、よく先生方と将棋をしたり、お酒を飲んだり、楽しく過ごしたことを覚えています。

また、部活動では、体育会スキー部に入部し、冬場はスキー場での合宿、夏場は週3~4日、放課後の厳しい筋トレ練習と明け暮れたことを思い出します。

こんな生活をしていましたので、食事は、生協の豚汁定食、カレーライスが多かったように記憶していますが、お金がないときは、ライスだけ注文し、テーブルにおいてある醤油をかけて食べたことを思い出します。また、東門前の平和堂(ピンフ)の丼物は、安くてうまくて絶品で、貧乏学生の強い味方でした。



思い出のフランス式庭園：堀井様よりご提供



昭和54(1979)年頃の農芸化学科3年次の実験風景(試験管を見つめているのが筆者)と、当時の農学部スポーツ大会(農芸化学科のクラスメートと記念撮影):高橋様よりご提供

こんな楽しい学生生活も4年間で終了となり、群馬に戻り就職したわけですが、試験研究機関での勤務では、仕事を進める上で、前田先生・宇田先生をはじめ、宇大の先生方には、何かと助言を頂き、感謝しかありません。最後は、農林大学校という教育機関での勤務でしたが、学生達と楽しく過ごすことが出来たのも、宇都宮大学農学部で学んだ経験が大きかったと思います。

また、峰ヶ丘同窓会群馬県支部も、毎年秋に、総会・懇親会を盛大に開催(コロナ禍で直近3年は出来ず)しており、これからも親睦を深めていきたいと思っています。

宇都宮大学農学部100周年 あっぱれ!

昭和63(1988)年 農学科卒 小峯 洋一

私は、1988年に宇都宮大学農学部農学科を卒業し、1990年に大学院修士課程を修了しました。研究室では、若林荘一先生、関谷治男先生、尾形亮輔先生、山根健治先生にお世話になりました。卒業後は林学科の大久保達弘先生の紹介で、南那須町役場に就職し、2006年の市町村合併により現在は、那須烏山市教育委員会事務局生涯学習課で文化財の保護及び活用に関する仕事をしています。

実家は、私が小学生の頃まで狭山茶の製造する製茶工場でした。中学生、高校生の頃には、熱帯魚の飼育をするとともに水槽で水草を育て繁殖させ、出入りしていた個人経営の熱帯魚屋さんへ水草を持っていき、他の水草や熱帯魚と交換してもらったり、茅ヶ崎愛瓢会に参加し、様々な瓢箪の栽培や加工をするなど、園芸や植物に親しんでいたことから、植物の栽培を学びたいと考え、教育学部や理学部

昭和63(1988)年頃の実験風景と、雷鳴寮の寮祭:小峯様よりご提供ではなく、宇都宮大学農学部に進学しました。

大学では、園芸学教室に所属しました。1年生の時に研究室の藤重宣昭先生にお願いして研究室で管理していた圃場の一部をお借りして、園芸植物の栽培をさせていただきました。研究室は校舎の1階にあったこともあり、夏には研究室の仲間と圃場近くの竹林からタケを切って節を抜き、実験台の水道から水を流して流しそうめんをして暑気払いをしたり、実験で使い処分するハーブで料理を作り、同期生たちとの交流を深めることができました。大学院時代には、当時学芸員の資格に必要な単位が大学では講座がなく取得できなかったことから、大学側をお願いし、単位取得のため埼玉大学の聴講生となることを承認いただきました。前例のないことも検討していただき、チャレンジさせていただけたことがありがたかったとともに、柔軟な大学の姿勢を感じられ、感謝しております。また、私は工学部の敷地内にある自治寮の雷鳴寮で寝食をしておりましたので、新入生歓迎コンパ、男体山登山、東武日光駅から寮まで走る日光マラソン、赤禪で神輿を担ぎ、寮から峰ヶ丘キャンパスを回り、二荒山神社をお参りし、東武デパートでトイレ休憩して戻ってくる雷鳴寮祭など、他学部の学生との交流もできました。

就職時の仕事は、自然観察指導員でした。地域の人たちと様々な生き物の観察をするにあたって、応用昆虫学教室が事務局となっている昆虫愛好会(現在はとちぎ昆虫愛好会)にも所属し、高橋滋先生にお世話になりました。現在も「志鳥田んぼの学校」や「宇都宮シルビアシジミ保全会」の活動で親しくさせていただいています。現在、私は那須烏山ジオパーク構想推進協議会の事務局でもあり、地質学教室の酒井豊三郎先生、教育学部の松居誠一郎先生(故

人)、農学部卒業生で栃木県立博物館名誉学芸員である柏村勇二先生には、アドバイザーとして参画していただき、酒井先生、柏村先生には今もお世話になっております。また、令和5年3月に国史跡に指定された烏山城跡の整備指導委員会には、大久保達弘先生に遺跡内の森林管理について参画していただく予定となっております、大学での交流が今も続いています。

在学中、勉学に関してのびのびと自由に学びの場を与えていただいた大学と先生方に本当に感謝するとともに、宇都宮大学農学部にて在学できたことを誇りに思っています。

**昭和45(1970)年3月 林学科卒
大槻幸一郎**

宇都宮大学で学んだ4年間。思い起こせば57年程前の遠い過去の事となってしまったが、人生の基礎を創ってくれた貴重な時間で有ったと感謝している。

宇都宮の雷の多さに驚くも、閃光の美しさに惚れ込んだり、故郷秋田の雪の多さと比較して、冬でも雪降らぬ快晴の青空の多さに「こりゃ秋田で農業やってもかかないっかねーべ」と嘆いたり、色白で目が大きな秋田美人や郷土料理キリタンポのような強く惹きつけるものが北関東には残念ながら、なかなか見当たらずに不満がっていた事も思い出す。

父は戦後の経済ブームを支えた紙パルプ会社で働いており、機会あるごとに連れて行かれたブナ林の美しさに憧れ、山から届けられる薪材やナメコ等に一層の興味を惹かれていた。これがキッカケでの農学部林学科の入学となったが、専門課程では森林計画に興味を持ち、森林経理学研究室では超難解な森林統計学の壁に挑むことになる。加えて夏休みには、研究室の先輩が勤務している帯広営林局でのアルバイトで森林調査の辛さを嫌というほどに思い知ら



昭和44(1969)年5月の船生演習林での測量実習(中央で帽子をかぶり立っている)と、現在の大槻様(2023年5月に自宅の庭で)：大槻様よりご提供



される事になる。根曲竹をかき分けて航空写真にマークされたサンプリング調査点に行き着く苦労は大変なもので、地下足袋は1週間でボロボロになる。その辛さは船生演習林での測量実習の比ではない。この反動から、翌年の夏休みには如何に楽をして森林調査を行えるかのために、航空測量会社にアルバイトに入り、航空写真を利用した森林調査技術を学ぶこととなる。しかし、計測に使われる精密機器の精度の高さに比較して、それを操作する人間の感覚の幅(誤差)は消し難く、何とか電磁波などでの自動計測の方法がないものかの素朴な疑問を指導教官たる社員にぶつける生意気な学生であった。いわばアナログの限界からデジタルの発想の必要性を直感していたのかも知れない。

霞が関・林野庁や県での役人生活35年を経て、学生時代のアルバイト先でも有った航空測量会社で第二の人生を送る事になったが、そこで目にしたのがレーザー計測による地形解析技術であった。学生時代の妄想にも近かった発想が、アメリカの軍事技術の延長から実用化されており、これが森林資源調査に画期的な変化をもたらしてくれると直感した。この技術の応用で、樹木の一本一本を樹高・胸高直径・樹種等が計測できるとすれば、これまでのサンプリング調査を基本とする難解な森林統計学からの開放にも繋がる。他社に先駆けてこの技術の森林分野への実用化に結びつけることになったが、その原点は我ら団塊の世代が体験した学園紛争に原点がある様に思う。大学改革に情熱を燃やしたその心には、真理を求める強い好奇心が燃えていればこそのものであったと思う。我が青春は、「何だろうな？」の好奇心がある限りこれからも続くと信じたい。

**平成元(1989)年3月 林学科卒
川上 晴代**

(栃木県東環境森林事務所)

男子多い、緊張する、やっていけるかなあ。女子高から進学した私はずが感じたことです。クラスには女子が2割弱でした。そんな私が平成元(1989)年3月に農学部林学科を卒業し、4月に栃木県庁に林業職として採用され、主に木材の利活用や団体の指導など林業普及指導に従事してきました。男性社会である林業にどっぷりと浸かり、現在は、栃木県東環境森林事務所(真岡市)の所長をしております。

宇都宮大学は私の家から近く、子どもの頃から親しみをもち、将来は入学したいと思っていました。自然の中でのびのびと学習できるようでしたので、林学科を選択しました。樹木学や測量などの実習が多く、宿泊を伴う実習もありました。船生演習林(塩谷町)には宿泊施設「愛山寮」がありましたが、当時は女子専用の部屋はなく、女子は全員娯楽室(麻雀部屋)に宿泊し、浴室は一つしかないため女子が入浴中とわかるよう札を表示するだけ。男子の後に入浴したら、お湯が黒かったことも…。野外での実習は楽しいものでしたが、標本作製のために採取した木の葉に虫がいて悲鳴を上げたところ、「何騒いでるの!」と女子から

注意され驚き、虫嫌いを克服しなくてはと思ったものの全く成長しておらず、未だに虫嫌いです。林学科は、白根山登山や実習での共同作業もあり、同級生や先生方との絆が他の部学科より強かったと思います。研究室は林産加工学研究室で、出井利長先生、吉澤伸夫先生、横田信三先生にお世話になりました。研究室対抗ソフトボール大会や、きのご狩り（夜はきのご鍋とお酒）、先生のお宅で奥様の手料理をいただいたりと楽しい思い出ばかりです。3年生後期に出井先生から、「栃木県では来年度も女性の林業職を採用するそうだ（採用が約束されたものではない）」と薦められ、栃木県職員採用試験を受験しました。男女雇用機会均等法施行後間もない頃でしたので、県では女性に受験して欲しいと考えていたのでしょうか。今私が、栃木県職員として活躍できているのも、出井先生の一言があったからです。

大学で林業について学んだこと、同級生や先生と築いた関係は、現在も栃木県で林業職として働く私の財産です。また、1学年違いの方々とは長い付き合いで、色々な面で助けてもらっています。他県に就職した同級生とは情報交換も続けています。全国に同窓生がいるので、大学の話題から入り緊張せず話を進めることもできました。沖縄県石垣島に旅行した際、ご家族が宇都宮大学農学部出身の方にお会いしたこともありました。都道府県庁や林野庁勤務の同窓生とは会う機会も多いのですが、お目にかかることのできない同窓生がたくさんいらっしゃいます。100周年の機会に大学にいらっしゃいましたら、150年を迎える栃木県で、私なりのおもてなしをさせていただきますので、ご連絡お待ちしております。

そして学生の皆様、ぜひ栃木県職員となり、私たちとともにとちぎの未来をつくりませんか。



昭和62(1987)年10月船生演習林での炭焼き実習と、平成27(2015)年8月栃木県職員（林業職・女性）懇親会：川上様よりご提供

平成4(1992)年 農学研究科修了

川村 学 (旧姓：近内)
(株式会社サカタのタネ)

1986年に宇都宮大学農学部農学科・1990年同大学大学院農学研究科に入学、故皿嶋先生、松澤名誉教授の指導のもとアブラナ科育種研究に没頭。1992年同大学を卒業。同年株式会社『サカタのタネ』に入社・ブロッコリー育種を約25年担当し、現在掛川総合研究センターの農場長を務めております。

宇都宮大学農学部には実家が農家のため、農業に貢献できるなにかを学ぶために入学しました。柔道部や研究室活動（ソフトボールやテニスなどスポーツ三昧でしたが）を通して得た仲間との飲み会は最高でした（記憶を失った事もしばしばありましたが、今となってはそれもまたよき記憶です）。学会参加や部活の遠征地で飲んだこともよき思い出ですが、いまはなき生協企画であるピアホールでの飲み会は、一生忘れられない思い出です。当時コンピューター居酒屋と称していた“かみよし”や名物からあげの“正善”、柔道部合宿の朝食でお世話になった“たつみ食堂”、研究室内の飲み会の際に買い出しにいった“鳥義”のやきとりなどなど、学生時代の飲食をささえてくれたお店ばかりです。今でもやっているのでしょうか？もう一度、お邪魔したいですね。

大学での研究経験を活かし、『サカタのタネ』でブロッコリー・カリフラワーの育種を約25年担当し、少なからず私が育成した品種を世の中に出すことができました。その間、



現在の川村様。今年1月に久しぶりにUSAを訪問、アメリカの父とよんでいるジェリーさん（研修時に大変お世話になりました）と近くのワイナリーでの1枚。ジェリーさんの家でしこたま飲んだ後（泥酔しております）に試飲したので、味はまったく覚えていません。ジェリーさんにいわれるままにお土産のワインを3本購入して帰国しました。左から、川村さん、ジェリーさん、会社の若手社員。



上記ジェリーさん宅でのランチ時の1枚。写真についてのコメント：ジェリーさんは料理が得意で、すべて手作りです。定番のBBQに加え、ワインにあうおつまみが用意されており、しこたま食べて飲みました。自前のワインセラーをもっており、たくさんのワイン在庫があります。：川村様よりご提供

ブロッコリーの国内外の産地を訪問し、たくさんの人との交流ができました。お金にかえられない貴重な財産です。また『サカタのタネ』入社後すぐにアメリカ研修という機会を得て、カルフォルニア州サリナスに1年間滞在した時ですが、当初英語が聞き取れず毎日不安な状態が続いていました。そんな中、現地スタッフに柔道場を紹介してもらい、アメリカのオリンピック候補選手との練習機会を得ました。彼にとって日本的柔道をする私はよき練習相手だったようで、練習時の送迎はもちろん大学での合同練習への同行他、観光地の案内など彼の家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。ご察しのように、その後の私のアメリカ生活は、公私ともに非常に楽しく・充実したものとなりました。改めて、柔道をやっていたよかったという思いと心の通じあう仲間がいることが大切だと感じました。

100周年誠におめでとうございます。今回は、100周年記念特集への寄稿の機会をいただき、本当にありがとうございます。原稿を書いている、タイムスリップしたごとく、懐かしき思い出がよみがえってきます。大学でお世話になった先生方や大学生活をともしした仲間とお会いしたくなる今日この頃です（年のせいでしょうか?）。ぜひ、これを見ている同級生のみなさん、どこかでお会いして思い出話を咲かせましょう。

平成4(1992)年 林学科卒
中村健太郎

(住友林業 森林・緑化研究センター)

1966年、横浜生まれ。1992年に宇都宮大学農学部林学科卒業、1994年に東京農工大学大学院農学研究科林産学専攻修了後、住友林業株式会社に入社し、研究開発や環境コンサルティングに従事しています。宇都宮大学農学部には、樹木のバイオテクノロジーに関する研究を行いたかったので進学いたしました。

大学時代は、とにかく良く食べ、良く呑み、良く遊び、良く学んだ(?)記憶しかありませんが、沢山の友人ができ、とても楽しい時間を過ごしました。特に、自分の知っていたこと(環境問題やバイオテク)を好きなだけ勉強できましたし、何よりも妻と出会うこともできました。研究対象が生き物(植物)で、実験を始めると中断することができなかったので、研究室に寝泊まりすることも多かった



卒業(入社)直後(1994年インドネシア・カリマンタン島のジャングルの中の事務所にて)と住友林業(株)森林・緑化研究センターで研究センター長を務める現在の中村様:中村様よりご提供

ですが、それも楽しい思い出の一つです。大学生時代に印象に残っていることといえば、学食です。朝昼兼用で食べていましたが、麺類+定食で1,000円を超え、2つのトレーを持って学食内を歩いていました。授業では、専門の授業が楽しかったのは言うまでもありませんが、教養で受けていた哲学の授業が印象に残っています。デカルトについて、レポートや試験で持論を展開したところ、単位を中々貰えませんでした。最後に先生から「よく勉強していましたね」という言葉を頂けたのが、とても嬉しかったです。それから、宇大に入学して、「しもつかれ」を生まれて初めて食べましたが、衝撃でした(笑)

私はラッキーなことに、卒論、修論の内容をそのまま仕事として続けることができたので、大学時代に教えて頂いたこと、そして学んだことが役に立っています。そして何よりも、指導教官の吉澤先生、横田先生に、原稿なしでプレゼンすること、英語でコミュニケーションができるようになることを徹底的にご指導頂いたお陰で、社会人になってからもプレゼンやコミュニケーションで苦勞することがありませんでした。

卒業後も共同研究等でご指導、ご協力頂き、大変感謝しております。今後は、微力ではありますが、宇大の更なる発展と後輩の育成に少しでもお役に立てればと思います。

平成5(1993)年3月 農学科卒
奥山 清市

(市立伊丹ミュージアム)

宇都宮大学農学部に入社したのは、昭和から平成に元号がかわった1989年の4月です。今だから白状しますが、数ある大学の中から宇大を選んだのは、「宇都宮」という名前の響きがなんとなく気に入ったという安直な理由だったのですが、その直感は大正解でだからこそ今の自分があるのだと思っています。宇大の魅力はいろいろですが、私的には「ちょうど良い」という点に尽きると考えています。まず、大学の規模が大き過ぎずちょうど良いし、都会と田舎の良いところ取りのトカイナな環境がとても具合が良い。青春18切符で東京の博物館や美術館の展覧会日帰り鑑賞も余裕だったし、バイクで講義前に日光方面の往復ツーリングなんてことも可能でした。またピリピリ&ガツガツしていない鷹揚な学生気質も私の肌に合っており、仲間や友人との出会いにも恵まれ実に楽しい4年間でした。

そんな学生生活で、私が最も影響を受けたのはやはり応用昆虫学研究室です。稲泉先生、高橋先生、香川先生、そして院生や4年生の先輩方から学び吸収したことは、今の自分の核となっています。研究室に入り浸って飲んで遊んで採集に明け暮れた日々ではありましたが、講義では学べないたくさんのことを教えていただきました。印象深い思い出がひとつあります。研究室に入ったばかりの頃、先生や先輩方は昆虫だけでなく植物や動物にも詳しいことに驚き、そして「昆虫を知るには、昆虫だけ見ては駄目」



市立伊丹ミュージアムで館長を務める現在の奥山様：奥山様よりご提供

学生時代の奥山様。平成5（1993）年頃の研究室対抗スポーツ大会



ということ学びました。その教えに従い私も虫だけでなく身近な自然にも興味を持つようになった結果、アパートと大学の間の往復が徐々に楽しく感じるようになりました。飛ぶ蝶や蛾や蜂を目で追い、葉上のイモムシや甲虫たちを探し、葉の形や樹形から植物の名前を学び、様々な花の美しさや香りを楽しみつつ、季節の変化を感じることができるようになってきたからです。不思議なことに、1～3年時も同じ道を同じ時期に通ったはずなのに、何も印象や記憶に残ってないのです。冬の繭梅、春の沈丁花、初夏の梔子、秋の金木犀の鮮烈な香りですら、当時の私はまったく気づかず通り過ぎていた事に気づき愕然としました。

宇大を卒業後、私は北海道大学大学院農学研究科に進学し、1995年に兵庫県伊丹市にある昆虫の博物館、伊丹市昆虫館に就職しました。そして2012年から2023年2月まで同館館長を勤め、2023年4月からは昆虫から離れ美術・工芸・俳諧・歴史をテーマとする市立伊丹ミュージアムの館長を勤めています。我ながら面白い経歴だと思えますが、これは人生の岐路で自らの直感を信じ、縁を大切にされた必然的な結果でもあるのです。「直感」と「縁」の大切さを教えてくれた宇大には、心から感謝しています。博物館に勤めようと思った原点も、かつての自分のように「気づかない」人に自然の魅力を伝えたいと願ったことがスタートだったのですから。

平成9（1997）年 農業経済学科卒

皆川 治

（鶴岡市長）

平成の米騒動と言われた年、平成5（1993）年に農学部農業経済学科の門をたたいた。



東北芸術工科大学監修のもと、元旅館をリノベーションした鶴岡市立農業経営者育成学校（SEADS）：皆川様よりご提供

バブルは崩壊し、就職氷河期の世代などとも言われているが、その実感は乏しかった。農業という自然環境に働きかけて、現物を得る産業に向き合ってきたためか、証券や土地の値段に翻弄されるバブルへの関心も薄かったし、どこか胡散臭いと思っていた。友人たちがタイ米を論評しているのを聞きながら、日本の米のありがたさと政策の矛盾を思った。

こういう進路もあるぞ、と水本忠武先生に教えていただき、平成9（1997）年に農林水産省に入省、農地法の所管課に配属となった。食料・農業・農村基本法の制定に向かっていく重要な時期であり、株式会社による農地取得を巡る議論も焦点の一つとなっていた。宇佐美繁先生の地代や農民層分解の講義が思い出された。卒業式の時だったか、「庄内は一端離れても人が戻る地域なんだよ」との会話が記憶に残った。

庄内平野の農家出身だったこともあるが、真岡市の附属農場やキュウリ農家調査の経験が、農家の皆さんとコミュニケーションを取る際の基礎となった。農家調査は福島県鏡石町で泊まり込みで行われ、その際県庁に出向していたのは、その後食料産業局で上司となった櫻庭英悦さんだった。

平成26（2014）年に山形県鶴岡市にUターンした。農業を継ごうと思っていたのだが、経験のある行政分野の方が故郷のお役に立てるのではと一念発起。平成29（2017）年の市長選挙で初当選、鶴岡市立農業経営者育成学校（SEADS）による農業人材の育成など2期目の市政運営に奔走している。応援弁士として駆けつけてくれた沖縄出身の水本先生、その奥様は鶴岡市の旧温海町の出身。教育学部卒の妻との結婚式の仲人でもお世話になった。

平成から令和へ。ウクライナでの戦争もあり、食品価格が上がり、肥料など農業資材価格も高騰し、再び、食料安全保障への注目が集まっている。農家の地域での円滑な合意形成と農民主権をいかに実現するか、競争条件が不利な中山間地の農地をいかに守るのか等々、課題は山積している。多様な農業が共存し、農村の多面的な機能を発揮させる地域政策と、経営者を育てる経済政策が相乗効果を発揮する農政が期待されるが、東京と地方の距離は未だ遠い様だ。四半世紀ぶりの基本法改正、そして憲法改正が必要なのであれば生きていく上で欠かせない食料安保をこそ。マクロとミクロの視点から、高等農林の伝統を引き継ぐ宇大からの提言、実践を期待したい。

平成16(2004)年 農業経済学科卒

井上真梨子 (旧姓：高久)

100周年、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

2004年農業経済卒の井上真梨子 (旧姓：高久) と申します。卒業後は、東京のIT企業でSEに従事後、監査法人でコンサルタントを勤め、結婚・出産。その後、独立し夫婦でカフェを営んでいたある日、実家 (農家) の父が倒れ、後継ぎ不在になった田んぼを引継ぐために、家族で那須へ戻り、2018年に就農。現在は「稲作本店」というお米専門ブランドの女性代表として、「栽培」と「販売」両面から稲作の未来を創ろうと活動。直近では、農水省&内閣官房主催の「R4ディスカバー農山漁村の宝アワード」にて「特別賞」を受賞しました。

私が農経に進学したのは、中高生の頃、田畑で必死に働く両親の姿を見て、何とかできないかと考えたためでした。入学当時、ITが急成長する時代で農業に活用できないかを考えていました。また、ゼミでは地元産品の利用について調べた際、農業地的那須でさえ、地産地消が進まない状況に衝撃を受け、課題に直面しました。「問題だらけの農業に、未来はあるのか」先生や仲間と朝まで議論した思い出が今の私の原点です。

しかし、卒業時の私は農業に入る自信がなく東京へ。両親を遠くから見て「いつかは継がねば…」そんな思いはありながら15年。父が倒れ、ついに実態に直面します。就農して最初の年、実際の田んぼを前に感じた、厳しい稲作の現実。悔しくて、はがゆくて、両親とたくさんぶつかり、いっそのこと辞めてしまおうかと夫婦で涙したことも。それでも宇大を出て東京を見てきた人間が、田舎に戻り農業をするという意義や責任を感じ「ここでやり残したくない」と思い返し、そこから「どうしたら農業に光を当てら



現在の井上様と、経営している「稲作本店」(「農業白書」にもその取組が記載されています)：井上様よりご提供

れるか」真剣に考え行動していくことになりました。

在学中に考えていた「ITの活用」と「地産地消」。これを手がかりに、SNSやクラウドファンディングを活用して、現場のリアルを発信し、「つくり手と食べ手がつながる農業」への転換をはかりました。そこから人と人との「対話」や「交流」が生まれて、新商品や取引先の開拓、EC展開など徐々に光が見えてきました。私は「生産者」「消費者」という垣根ではなく、未来の風景や食卓がどうなっていて欲しいかをみんなで一緒に考えていけたら、農の未来は決して暗いものではないと思っています。

宇大の理念は「人類の福祉の向上と世界平和に貢献すること」だそうです。人口100億人・食糧危機がささやかれる時代に、あるべき農業の姿とは。未来の子どもたちに日本の素晴らしさをどう伝えていくか。私も宇大の卒業生として「希望」の一助となれるよう、ニッポンの原風景を未来へつないでいきたいと思います。

最後となりますが、宇都宮大学農学部への更なる発展と卒業生の皆様のご多幸を祈念いたしまして、私からの言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

平成23(2011)年 林科学科卒

矢部 瞳 (旧姓：阿久津)

2011年に宇都宮大学農学部森林科学科を卒業いたしました、矢部瞳 (旧姓阿久津) と申します。大学卒業後は那須でホテルを経営する「株式会社二期リゾート」に入社して、「アートビオトープ那須」や「二期倶楽部」などのホテル専属自然ガイド「森のコンシェルジュ」として働いていました。3年後に、趣味であったアイリッシュハーブを本格的に学ぶため、アイルランドへ渡り1年間過ごしました。帰国後は進路に迷って数年フラフラしていましたが、自然ガイドのできるハーブ奏者「森のハーブ弾き」で生きていくと決心し2017年に起業しました。その後、栃木県民の森インタープリターとのダブルワークなどを経て、宇都宮大学大学院地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻コミュニティデザインプログラムに進学し、「人とヤマとの関係性」をテーマに研究を行いました。現在は国産材で製作したハーブ「森の竖琴」の企画・販売・演奏活動を中心に、人と自然のご縁をつむぐ「株式会社つむぎ」を経営しております。

宇都宮大学農学部森林科学科に進学した理由は、森林の分野から環境問題の解決に寄与することが中学時代からの夢だったからです。自宅から通学できることと、演習林での実習が多いところにも惹かれました。大学時代は本当に実習が多く、森林科学科を志していたながら、高校時代まであまり山で遊ぶ経験をしてこなかった自分にとっては、大変良い経験になりました。大量の新聞紙に樹木の枝葉を挟んで標本を作製した樹木学実習も、岩だらけの急斜面を半泣きになりながら測量した砂防実習も今はいい思い出です。私が所属していた森林生態学・育林学研究室は先輩方も先生も大変面倒見のよい研究室で、卒業論文提出直前は



自然ガイドのできるハーブ奏者「森のハーブ弾き」として活躍している矢部様：矢部様よりご提供

先輩方からリポビタミンDやカップラーメンなどの差し入れを頂きつつ、毎日夜遅くまで研究室で発表の練習や論文の修正をしたことが印象的でした。

私は幸い、卒業後も森林関係の業界で活動しています。自然ガイドをするときや、自社で企画販売している国産材ハーブの説明をする際など、仕事の上で大学時代に学んだ森林や木材の知識が役に立っています。森林科学科のOB、OGと出会うことも多く、同窓生の皆様の活躍を感じています。

現在の仕事柄、小中学校や高校で演奏や講演をする機会があるのですが、私が宇都宮大学農学部森林科学科を卒業していることを聞いた高校生が実際に進学したという話を聞いて、自分が人の人生に影響を与えていることに身の引き締まる思いがしました。これからも同窓生の皆様とともに、日本の森林が良い方向に向かうよう、日々活動していきたいと思います。

平成27(2015)年 生物生産科学科動物生産学コース卒 荒川 友紀

(那須どうぶつ王国)

私は2015年に宇都宮大学農学部生物生産科学科動物生産学コースを卒業した。卒業後、栃木県那須町にある那須どうぶつ王国という動物園で、飼育員として毎日動物たちの世話やトレーニングをしている。

私が宇都宮大学に進学しようと決めたのは、高校三年生の時のオープンキャンパスがきっかけだった。それまでは、「動物が好きだから、動物のことが学べる学校がいいなぁ」と、フワっとしたビジョンで進学先を探していた。そんな中出会ったのが杉田昭栄先生の“カラスの授業”。その授業は、カラスの知能や音声コミュニケーションなどを面白く学べる内容で、私は心を射抜かれた。「自分は動物が好きといっているわりに、こんなに身近な野生動物のことも何にも分からないのか。カラスって奥が深くて面白い！杉田先生のもとでもっとカラスを知りたい！」と目標が決まった瞬間だった。

大学4年生、機能形態学研究室で、念願のカラス漬けの1年間が始まった。卒業論文のテーマは何にしようか…。



那須どうぶつ王国で飼育員をしている現在の荒川様と、担当しているニホンライチョウ（ツシヤママネコやニホンカモシカといった日本の保全対象種も担当しています）：荒川様よりご提供

私はカラスを守るために“カラスの体調不良のサインを見つける”ことにした。加速度ロガーという体の動きを記録できる機械を背負子に入れてカラスに背負わせ、週に1回採血を実施。血液の値と行動の相関性を見つける為、ロガーのデータとにらめっこをしながら目視での観察も行い、カラスのことで頭がいっぱいな日々を送った。1年間相棒として一緒に過ごしたハシブトガラス3羽、いまだに名前を覚えている。大二郎、中太郎、小太郎。きみたちのおかげでいまがある、ありがとう。この研究内容を2014年に開催されたカラスシンポジウムでも発表させて頂いたこともいい思い出だ。

卒業後、動物園の飼育員となり、本州中部山岳地帯に生息する絶滅危惧種、ニホンライチョウの飼育繁殖を任せられ、環境省や国内の動物園、研究機関と協力しライチョウの野生復帰事業に取り組んだ。2021年に中央アルプスから野生のライチョウ家族を7羽受け入れ、動物園で繁殖させ、2022年、19羽に増やして故郷の山へ返した。日本の動物園において、固有絶滅危惧種の生息域外からの野生復帰に成功したのは初である。ライチョウを飼育する上で大切なことは、異変をすぐ見つけ対処することだ。物言わぬ動物の体調の変化を見つけるのは非常に難しい。しかしそれには間違いなく、ひたすら行動を観察し日々の変化を見極めようとカラスと向き合った宇都宮大学でのあの経験が活かされていた。宇都宮大学での生活は、動物と生きる私の基盤となっている。「カラスの体調が悪くなったらすぐ助けたいので、そんな研究をやりたいです」と先生に相談した時のことを今でも昨日のことに覚えている。先生方は私の意思を尊重し後押ししてくれた。濃い4年間を支えてくれた先生方、友人たち、周りの方々に心から感謝している。本当にありがとうございます。これからもこの経験を活かし、命と向き合っていきたい。

平成27(2015)年 生物生産科学科応用生物学コース卒 藤本 正太

(高崎健康福祉大学)

2015年に宇都宮大学農学部生物生産科学科応用生物学コースを卒業いたしました。卒業後は群馬県の高崎健康福

社大学農学部で助教として働いております。高校の頃に、これからはバイオの時代だ、という趣旨の指導をいただき、農学部に興味を持ちました。幅広い分野の研究が行われていること、附属農場が大きいこと、宇都宮市の利便性などに魅力を感じ、宇都宮大学の農学部に進学いたしました。

大学生活で一番に思い出すのは、やはり研究室のことで、私は博士課程まで進学しましたので、研究室にも7年ほどお世話になりました。カイコに感染するウイルスの研究をしており、未解析のウイルス株の解析やウイルスの遺伝子の働きなどを研究していました。ウイルスの感染の経過を追うときには、実験が早朝や夜遅くになることもあり大変でしたが、それも含めて非常に充実した研究室生活でした。研究室に関する思い出は、日常的な実験やディスカッションに加えて、個性的な先輩や後輩、ラボのイベントや小旅行など、ここには書ききれないほどたくさんあります。特に印象に残っている食は、研究室の同級生が懇親会に持ってきた“タガメ”入りのお酒です。焼酎にタガメをつけておくとラフランスの香りがする、とのことで同級生が自作のタガメ酒を研究室に持ってきてくれたことがあり、確かにラフランスのような爽やかな香りがして驚きました。味はあまり美味しくなかったですが。また、授業で印象深かったのは、やはり実験・実習です。応用生物学コースの実験では、昆虫や植物のウイルスの観察と検出、アブラムシの飼育、植物胚の切片の作成など、かなり突っ込んだ内容を体験しました。実習では農場や演習林での日常的な実習の他に、泊りがけの実習がいくつかあり、同級生との懇親会や腕相撲大会など、多くの印象に残る思い出があります。

現在は大学に勤務していますので、大学での経験がそのまま活かされていると感じています。学生時代は何も考えていなかったのですが、いざ自分が教員になってみると、当

時の先生方がいかに講義や研究室の運営を工夫されていたのかが分かってきました。学生時代のことを思い出し講義の資料や方法などを試行錯誤したおかげか、最近では、講義が分かりやすい、などのコメントをもらうこともあり、うれしく思っています。

平成31(2019)年 応用生命化学科卒
和田 凪左
(TOPPANエッジ株式会社)

2019年に宇都宮大学農学部応用生命化学科を卒業、2021年に地域創生科学研究科農芸化学プログラムを修了しました。卒業後はTOPPANエッジ株式会社(旧トッパン・フォームズ株式会社)の中央研究所にて研究開発に従事しております。高校生の時にSSHの活動で、応用生命化学科の先生方にお世話になったことがきっかけです。大学の模擬授業のほかに、蕪山先生の研究室にお邪魔し、大学での研究を体験させていただき、学習内容が面白いと感じました。もともと化学が好きで、『生物・化学・環境』のいずれか1つでも興味があるならおいで!という学科説明で応用生命化学科に進学しようと決めました。

研究室は金野先生の高分子材料化学研究室でした。羽生先生、金野先生をはじめ、当時博士課程の田中先輩や菊地先輩に研究室での生活・勉強共にお世話になりました。先輩にたくさんアドバイスをいただき、実験やゼミを頑張ったことが印象に残っています。また、研究室で忘年会や先生のお誕生日パーティーをしたり、学会終わりにみんなで観光したり、趣味が合うメンバーで遊びに行ったり、勉強以外にも楽しく過ごせたことも同じくらい印象に残っています。

現在勤めているTOPPANエッジ(株)は、修士1年の時から共同研究に参加させていただいた縁で入社しました。研究室で学んだことがそのまま仕事になるとは思っていなかったのですが、このような機会を与えてくださった金野先生に感謝しています。現在も共同研究しており、研究室の皆さんと関わる機会がありますが、学生の時とまた違う立場で大学にお邪魔していることに不思議な感覚になります。お世話になった研究室と今もつながりがあることをうれしく思いますし、今までの研究成果を製品として残せるように頑張りたいと思います。



高崎健康福祉大学農学部で助教を務めている現在の藤本様。研究室の学生に実験の説明をしている様子：藤本様よりご提供



平成31(2019)年3月の卒業式に研究室メンバーと記念写真：和田様よりご提供